



【教師の指導例】編

「分からない」が「分かる」に変わる児童生徒の思考に沿った指導過程

1 問題場면을数理的に捉えさせる

- 本時の問題に関する領域のねらいや学習内容等を理解する。
- 本時の問題に関連する既習内容や児童生徒の実態を把握する。

2 課題を見いださせる（焦点化）

- 既習内容や生活経験との共通点や相違点を明確にする場を設定する。
- 新たな疑問や求めることについて全員が理解できるようにする。
- 課題（めあて）を基に、本時の終末の姿（何が分かり、何ができればよいか）を示す。

3 見通しをもたせる

- 既習内容や経験で用いた見方・考え方が想起できるように、既習内容を教科書等で確認する。
- 結果の見当を付け、授業終末に解決の過程や結果について振り返ることができるようにする。

4 試行錯誤・比較・検討させる

- 結果だけでなく、自分の考えを言葉や図、式等を用いて整理できるように指導する。
- 仲間の考えについて、自分の考えや表し方の共通点、相違点に気付くことができるようにする。
- 結果について確かめたり、まとめたりする学び方を指導する。
- 用語・記号を用いることよさ（簡潔・明瞭・的確）について指導する。

結果や判断の根拠が明確か、一般化されているかを見届けましょう。



5 結果を導く・振り返らせる

- 本時の学習内容の見方・考え方を基に、既習内容と本時の学習内容を関連付ける。
- 解決の過程や結果を振り返り、自分の変容に気付くことができるようにする。

式と図等、既習と本時を関連付ける問い返しをしましょう。



6 統合的・発展的に考えさせる

- 本時の問題解決で獲得した見方・考え方と既習の見方・考え方を関連付ける。
- 場面や数、形等を変えて、知識及び技能や考え方を活用できる問題を準備する。

まとめは、他の場面で適用する足がかりとして、また、次時や関連単元の学習のスタートと捉えましょう。

